

Title	<書評> The Social Sciences in Modern Japan: The Marxian and Modernist Traditions. Berkley and Los Angeles: University of California Press., Barshay, Andrew E., (2004)
Author(s)	寺田,晋
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 309-315
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25868
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## The Social Sciences in Modern Japan: The Marxian and Modernist Traditions. Berkley and Los Angeles: University of California Press.

Barshay, Andrew E., (2004)

寺田 晋

and 手短な要約を知りたい方は、こちらを参照されると良いだろう。 の内容を簡潔にまとめたものになっている。著者自身による本書の の観点からみた丸山眞男」『思想』964号)。 庫記念講演会における講演が翻訳、 2004年6月25日に東京女子大学で行われた第6回丸山眞男文 れは既に『南原繁と長谷川如是閑―国家と知識人・丸山眞男の二人 バーシェイはカリフォルニア大学バークレー校の歴史学部教授であ であり、 科学史の概説にあてられており、 Intellectual in Imperial Japan: The Public Man in Crisis. (Berkeley うに思われる。それについては最後に触れたい。著者のアンドリュー 英語圏の読者に紹介した著作としては、 本書全体の評価としては、二つの問題点を指摘することが出来るよ より広く、 済学史などの個々の学問分野の史的記述はこれまでもあったが (=)、 会科学者としての知識人たち」(きを対象とした歴史研究である。 本書は、 師 本書の構成は、 Los Angeles: University of California Press, 1988) があり、 日本研究センター所長を務めている。 一』(ミネルヴァ書房、 その点にまず大きな意義があるといえるだろう。ただし、 日本の社会科学という視点から、 近代日本における社会科学の形成期から現在までの 第1章と結論部が総論に、第2章が近代日本社会 1995)として翻訳されているほか、 それ以外の第3章から7章までが 紹介されている(「社会科学史 おそらく本書が最初のもの 著書としては、 なお、この講演は本書 戦前戦後の知的潮流を State ana

いくつかの主要な傾向を代表する知識人として、戦前の講座派マル事例研究となっている。これらの章では、日本における社会科学の、

いるといえるだろう。 であり、その時期の社会科学の掘り起こしに研究の余地が残されて の流行以前に関しては、 影響の大きさという点では、 いる。こうした構成は、マルクス主義が当時の知識人にもたらした 記述も講座派やマルクス主義全般との対決という視点が軸となって 研究が始められているだけでなく、その後の社会科学者についての 向性を大きく決定付けたものとみなしているため、 クス主義によって提示された分析が、その後の日本の社会科学の方 いるのは、著者が近代日本における社会科学の二大潮流とみなす、 表題にあるとおり、これらの諸傾向の中でも特に焦点が当てられて して近代主義者として丸山眞男(第7章)が取り上げられている。 ら宇野弘蔵(第4章)、宇野学派から大内力、馬場宏二、玉野井芳 クス主義から山田盛太郎 ルクス主義と近代主義である。 (第5章)、 市民社会派として内田義彦と平田清明(第6章)、そ 第2章の概説において触れられているだけ (第3章)、戦後のマルクス主義経済学か 妥当なものといえるが、マルクス主義 ただし著者は、 戦前の講座派マル 講座派から事例

農村を訪れれば、すすんで農民と話をし、彼らを「愛しかつ理解しは都市に生活する進歩的知識人であり、休暇の際に弟リョービンのその人物とはトルストイによってロシアの典型的インテリゲンツィすると非常に奇妙なことに、本書はトルストイの小説『アンナ・カすると非常に奇妙なことに、本書はトルストイの小説『アンナ・カすると非常に奇妙なことに、本書はトルストイの小説『アンナ・カすると非常に奇妙なことに、本書はトルストイの小説『アンナ・カ

なる存在として農民を理解しているのだ。い階級の人間との対比において農民を愛し、また普通の人間とは異て農村は、あくまで余暇のための場に過ぎない。彼は自分の好まなて農村は、あくまで余暇のための場に過ぎない。彼は自分の好まなで農村は、あくまで余暇のための場に過ぎない。彼は自分の好まなである」と語るような人物である。こうした態度は、農村が自らの

だ」(ミ)。 既に発展の主要なモデルが達成されており、他者はそれを求めて努 域では「遅れ、 具体的には、ドイツ、ロシア、日本という、環大西洋の列強による 定の社会とは、著者が「発展的疎外」(developmental alienation) ける社会科学者の行動パターンの一つを示しているからだ。ある特 シェフが意味を持っているのは、彼の行動が、ある特定の社会にお 国が辿った近代化の過程に大きく条件付けられると仮定した上で、 質的違いや欠如を、見下した態度や軽蔑、 力しなければならなかったからであり、また、発展が疎外されてい そして「この疎外が発展的であったというのは、環大西洋において、 植民地化を免れた後発の帝国に共有された条件であり、これらの地 いう概念によって理解しようとする社会である。発展的疎外とは、 て存在していることを、絶えず思い起こさせるものであったから たというのは、それぞれの〝モデル国〞が同時に脅威でもあり、 文化的な自己イメージの逃れられない特徴となった」、とされる。 ところで、日本の社会科学者を扱う本書にとって、このコズヌイ 著者は、 後進性、 一般的にそれぞれの国における社会科学は、 "伝統"の突出といったことが、 相互的な恐怖の対象とし 歴史的 ٢

件の一つであった、と主張する(ご。これが本書を貫く主要な条件の一つであった、と主張する(ご。これが本書を貫く主要なテーサのように現れるのだろうか。物語の終盤において、コズヌイシェフが6年間の労苦をつぎ込んで完成した著作は、学界に学問上の革命を、世間に熱烈な興奮の渦を巻き起こすという彼の期待に反して、た空虚感を、彼はスラブ問題(四千万のスラブ民族の解放)に打ち込むことによって解消しようとするのである。このエピソードにじた空虚感を、彼はスラブ問題(四千万のスラブ民族の解放)に打ち込むことによって解消しようとするのである。そして、その結果生じた空虚感を、彼はスラブ問題(四千万のスラブ民族の解放)に打ち込むことによって解消しようとするのである。そして、その後のロシア知識人の革命的マルクス主義への傾倒、といった傾向こそ、発展的疎外下の知識人の行動パターンの一つとして著者がみなすものなのである。

それが十分になされているとはいい難い。 として記述する試みは、著者自身が発展的疎外の一つの帰結とみなす、日本に「永遠の特殊性」(perennial particularity)(当を見出そうとして記述する試みは、著者自身が発展的疎外の一つの帰結とみな新しいあり方の一つとしても評価できるだろう。ただ、発展的疎外をという主張に説得力を持たせたいのならば、著者が発展的疎外をという主張に説得力を持たせたいのならば、著者が発展的疎外を終したとみなす他の地域との比較研究が欠かせないが、本書では、という主張に説得力を持たせたいのならば、著者が発展的疎外を終したとみなす他の地域との比較研究が欠かせないが、本書では、という主張に説得力を持たせたいのならば、著者が発展的疎外を経験したとみなす他の地域との比較研究が欠かせないが、本書では、という主張に説得力を持たせたいのならば、著者が発展的疎外を経り、日本に対しませい。

以下、著者の語る近代日本社会科学史を要約してみよう。以下、著者の語る近代日本社会科学史を要約してみよう。 実際には、一人の社会科学者が社会の現実の作用を期待を寄せる。実際には、一人の社会科学者が社会の現実の作用を期待を寄せる。実際には、一人の社会科学者が社会の現実の作用を期待を寄せる。実際には、一人の社会科学者が社会の現実の作用を期待を寄せる」(\*)ことがあるのであって、筆者によれば、そのような現象が、ある時期の日本の社会科学において起こったのである。

(moment)を導入している。それは1)新伝統主義(neotraditionalism)、(moment)を導入している。それは1)新伝統主義(neotraditionalism)、の自由主義、3)マルクス主義、4)近代主義、5)文化主義(大正期、3)1920年代後半、4)終戦直後から60年安保まで、5)60年安保以降、現在に至るまで、を主要な時期として想定しているが、単なる時期区分とはされていない。そこには、して想定しているが、単なる時期区分とはされていない。そこには、して想定しているが、単なる時期区分とはされていない。そこには、もての契機が特定の時期を越えて互いに影響しあっていること、を指摘それらが特定の時期を越えて互いに影響しあっていること、を指摘それらが特定の時期を越えて互いに影響しあっていること、を指摘をおうとする意図があるのだろう。

## 1 新伝統主義

新伝統主義は、制度としての社会科学の成立期までに形作られた

まり、 進めた人物として、 義から、ドイツ歴史学派の選択的受容へ、社会学では Gemeinshaft 奪に対する批判者として、 壊や、家族国家観にみられるような農村の 社会政策学会(1909)等の設立によって制度的に確立されるのであ なる。これらは最終的には国家学会(1887)、国家経済会(1890)、 つまり共同体の規範の重視といった形で社会科学を規定するように は、明治初期の福澤諭吉や田口卯吉に見られたような古典的自由主 然法思想から、ドイツ国家学 Staatslehre の選択的受容へ、経済学で 家主導の近代化は、 い対立を覆い隠す役割を果たしたのである。新伝統主義が支えた国 からの搾取によって遂行される状況において、あたかも国家が「一 のが「家族国家」観である。新伝統主義は、資本主義の発達が農村 によって生じる混乱を抑制するための新たな伝統の創造である。つ の下で国家主導の近代化を推し進めるイデオロギーであり、 イデオロギーをさしている。それは、広く共有された後進性の意識 つの大きな村共同体」(\*\*)であるかのように装うことで、生じかねな 「伝統」が排除される一方で、国家統合のために役立つとされる 一方、著者は、こうした国家と資本主義による農村の慣習の破 後進性の意識の下で、 が選択され、創造されていったのである。 政治学では、自由民権運動に見られたような自 柳田国男と彼の民俗学を位置づけている。 また同時に土着的なものの本質化を推し 発展の障害となるとみなされた封建的 「家」の象徴的価値の収 その中心をなす 近代化

#### 2 自由主義

新伝統主義が生み出したタブー―天皇制、家、労働問題―に対して責務があることを認めつつ、しかしその責務を達成するための受容可能なま義であり、これは美濃部達吉と吉野作造によって代表させられている。しかし、自由主義は、所与の制度にすでに理想が内在していめに、制度そのものの変革よりも個人的な理想主義へ向かう傾向がめた、治度そのものの変革よりも個人的な理想主義へ向かう傾向がめた、おらに、その後の深刻な不況の景況を受けた政治の激化めた。さらに、その後の深刻な不況の景況を受けた政治の激化のために自由主義は周辺へと追いやられていくことになる。

# マルクス主義

3

農村の半封建的性格を指摘するのだが、そうした農村からの搾取をおいて果たす役割を無視したことの弊害を指摘する。山田は日本のの到達点として評価する一方で、文化やイデオロギーが社会統合に思想の、それ以降のすべての歴史を条件付けることとなった」(\*)。 こうしたなか、日本社会における対立を、はじめて分析したのがこうしたなか、日本社会における対立を、はじめて分析したのがこうしたなか、日本社会における対立を、はじめて分析したのが

交錯をも、もたらしたのである。

交錯をも、もたらしたのである。

交錯をも、もたらしたのである。

交錯をも、もたらしたのである。

交錯をも、もたらしたのである。

交錯をも、もたらしたのである。

一方、著者は、こうした日本の資本主義の特殊性の主張という講の問題を乗り越えたものとして宇野弘蔵の理論を評価する。宇野は、日本の資本主義を「実在する規範からの単なる逸脱や、永続いることで、日本の資本主義を「実在する規範からの単なる逸脱や、永続のまることが可能となったのである。ところが、段階論において理解ることで、日本の資本主義を資本主義一般の発展原理において理解ることで、日本の資本主義を資本主義一般の発展原理において理解ることが可能となったのである。ところが、段階論に位置づけることが可能となったのである。ところが、段階論に位置づけることで、日本の資本主義を資本主義一般の発展原理において理解することが可能となったのである。ところが、段階論において理解することが可能となったのである。ところが、段階論において理解することが可能となったのである。ところが、段階論において理解することが可能となったのである。ところが、段階論において理解することが可能となったのである。ところが、段階論において理解することが可能となったの発展国になった。

### 4 近代主義

する。 のかは曖昧である。 思想家としての丸山という側面を認めつつも、「デモクラシーの非 が指摘するような、ナショナリズムの合理化を目指した国民国家の のなかの、「ナショナリズムの合理化と比例してデモクラシーの非 靖らによる批判に関しては、「日本におけるナショナリズム」(1951) があったことの方が問題であろうとしている。さらに近年の山之内 の丸山が封建制や資本主義、 引いてきている。筆者は、 あって、他の文化に普遍的価値を認めないのではないとした発言を 対して筆者は、丸山自身が、自分はヨーロッパの思想に多くを負っ 丸山がヨーロッパ近代を理想視しているというものである。 対して与えられてきた様々な批判を検討している。典型的な批判は、 れることで、講座派による日本社会分析を乗り越え、新伝統主義の 化 合理化」という命題と切り離して丸山を理解してはならないと反論 合理化が行われねばならぬ」という一文に依拠することで、 ているが、それはヨーロッパの思想が人類共通の遺産だからなので イデオロギーを明るみに出したのが近代主義である。著者は丸山に 講座派においても宇野学派においても、排除されていたのは、 主体性、 しかし、肝心の「デモクラシーの非合理化」が何を意味する エートスといった視点だった。こうした視点を取り入 いずれにせよ、 ヨーロッパ中心主義よりも、 近代性といった範疇を実体視する傾向 丸山についても発展的疎外とい 特に戦時中 山之内 これに 文

まったのである。 まったのである。 まったのである。 は近代化論という成長主義(growthism)に取って代わられてした 大規模な社 にあったとするような近年の批判を著者は受 な変容を乗り越えることが出来なかったことは認めている。近代主 表は近代化論という成長主義が、高度成長のもたらした大規模な社 のというのが著者の立場である。丸山に代表される近代主義が、55 がというのが著者の立場である。丸山に代表される近代主義が、55 がというのが著者の立場である。丸山に代表される近代主義が、55

#### 5 文化主義

高度経済成長がもたらした大きな変化は農村問題を消滅させ、発展的疎外という、日本の社会科学に統一を与えていた主要な条件の一つを掘り崩すことになった。後進性の意識はナルシシズムへと反田国男の影響から日本の「土着」の文化を再評価しようとする文化田国男の影響から日本の「土着」の文化を再評価しようとする文化田国男の影響から日本の「土着」の文化を再評価しようとする文化田国男の影響から日本の「土着」の文化を再評価しようとする文化の大検討してはいない。これらは著者によれば発展的疎外という問題を「解決」してはいないのであって、「扱っている対象の分析というよりもその兆候である」(\*\*)と手厳しい。著者は現在の社会科学の特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギーの特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギーの特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギーの特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギーの特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギーの特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギーの特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギーの特徴を、かつてあった統一性が失われた結果としてのイデオロギーの特徴を、かつてあった。

最後に、本書の評価として二つの問題を指摘しておこう。一つは、

本書が丸山眞男と石田雄による研究に大きく依拠しているために、本書が丸山眞男と石田雄による研究に大きく依拠しているために、大きしたことで、社会科学史としてしまえば、個人としては有名でなくとも社会的には大きな機能を果たす官僚のような社会集団には必要だが、知識人を対象としてしまえば、個人としては有名でなくとも社会的には大きな機能を果たす官僚のような社会集団にでなくとも社会的には大きな機能を果たす官僚のような社会集団ににあったというような批判は荒唐無稽なものであると思われるが、年が反映されて戦後日本の社会システムと近代主義が共犯関係によって形成された戦後日本の社会システムと近代主義が共犯関係によったというような批判は荒唐無稽なものであると思われるが、年が大力では、こうした視点の欠如にあると思われる。とはいえ、原因の一つは、こうした視点の欠如にあると思われる。とはいえ、原因の一つは、こうした視点の欠如にあると思われる。とはいえ、原因の一つは、こうした視点の欠如にあると思われる。とはいえ、ながなされることは、比較研究の促進に貢献し、新たな視点からの社会科学の見直しに貢献することだろう。

#### 注

- (i) p.1
- (当) 例えば経済学に関しては Morris-Suzuki, Tessa, 1989 A history of Japanese economic thought. London: Routledge. など
- (i≡) p.28
- (.≥) p.241
- (v) p.x
- ('5) p.241

(vii) p.6 (viii) p.75 (ix) p.47 (x) p.54 (xi) p.174 (xi) p.251